

---

# ねがい

つきよのこねこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねがい

### 【Nコード】

N6752L

### 【作者名】

つきよのこねこ

### 【あらすじ】

願いを言え！と、自称魔界の王子にまわりつかれて一週間。そんなこといきなり言われても…。とても短いショートストーリーです。

あたしは悩んでいた。とってもとっても悩んでいた。

「おい、決まっただか」

頭上の低い声に目を上げ、大きく溜め息。

「なんでもいいんだよ！あるだろー、夢とか希望とか」

あたしはまた溜め息。

「そんなこと言われても…」

「まったく…これだから人間って」

ブツブツ文句を言い出す、空中に浮かぶ彼を見る。  
そんなこと言われても…思い浮かばないんだもん…

・  
・  
・  
・

一週間前。彼は唐突にあたしの前に現れ、言った。

「お前の望みを一つだけかなえてやる。ほら、言え」

彼の話だと、実は彼は魔王の息子らしい。魔界の王の後継ぎ。  
ある日。彼が人間界に遊びに来ていた時に、すっかり封魔師に小さな小箱の中に封印されちゃったんだって。

その小箱にはお札らしきものが貼ってあったんだけど、長い時間の経過と共に風化して、とれかかっていたの。

それを古道具屋で見つけたあたしは、そんなことなど知る由もなく…小箱を開けてしまい…その上、封魔師は小箱だけではなく、小箱を開けた者の願いを一つ叶えなければ、彼が自由になれないように彼自身にも呪縛をかけており…。

以来、一週間。願いを言え！と付き纏われている。

「早く言えよ、なんでもいいんだからさー」

フワフワと空中を浮かびながら彼は言い放つ。

彼も必死なんだろう。何しろ、あたしが願い事を言わない限り、自由になれないのだから。しかし…

「あーもう、うるさいなーっ！！」

あたしは大きく叫んで、彼を見上げる。

漆黒の髪に真紅の瞳。綺麗すぎる顔立ち…美しい肢体。人間ではない存在。魔性の王子。

「少しは黙ってなさいよねっ！！」

フワフワ浮かんでいる彼の顔に人差し指を突き付ける。

「それは願いか？」

喜々として言う彼に、あたしはきっぱりと言い切る。

「違うわ。命令よ」

「あのなー私は魔界の正当な後継ぎ…」

グイと襟首を掴んで、あたしは彼の口を閉じさせる。

「自由になりたいんでしょ？なら、ごちゃごちゃ言わないで、あたしが願いを言うのを待ってなさいよ。でないと、一生このままってことになりかねないわよ？」

まったく…制服姿の女の子が宙に浮いている絶世の美貌の男と言いつ争っている光景なんて…誰かに見られた日には…あたしの人生はおしまいだわ…。

あたしは思つて、また大きく溜息をついた。

・  
・  
・  
・

「人間の女というのは、こんなに強いものなのか…？」

彼の、一週間あたしにつきまとうていた感想らしいけど…あたしから言わせてもらえば、現実問題として彼は実在して…こうして宙にフワフワ浮いているわけだし…非現実的だとは思うけど、仕方な

い。これは現実だもん。それとも何！？

「魔界の王子！？きゃーこわーい！！」

とか言えはいいわけ？

ばっかばっかしい！！

あたしの家のあたしの部屋。机に向かうあたし。

「私の知っている人間の女はもう少しか弱かった気が…」

彼の言葉を完全に無視して、目の前の参考書に目を注ぐ。

「ちょっと、静かにしててよ。あたしはあんたと違って忙しいんだから！！お気楽な魔界の王子とは違うのよ」

視線をそのままに告げるあたしに、彼は大きく溜め息をつく。

「まったくわからん。この女はいつたい…本当に人間か？人間の精神構造はもう少ししろいと思っていたが…何ゆえそんなに強いんだ？お前は人間亜種か？」

大変失礼なことを淡々と述べる美貌の青年に目を向け、

「人間の精神構造なんて、簡単にわかるわけないでしょ。魔界の王だか王子だか知らないけど、ここは人間界であたしはあんたの自由を握ってる存在なんだから、もう少し口を慎んだら？人間界じゃ、口は災いの元っていうわよ？」

言ったあたしに、彼は大袈裟に肩を竦めてその場から消えた。暫くの静寂の後。不意に声が聞こえて来た。

あたしは参考書から目を上げた。声は隣の部屋から聞こえてきている。

初めは小さなヒソヒソ声だったのが、どんどん大きくなっていく。シャーペンを机の上に置く。隣から聞こえてくる声は、今でははっきりとした言い争い、怒鳴り声と化していた。

「また、やっているな…」

唐突に、背後で彼が呆れたように呟いた。まったく、神出鬼没な奴だ。

ヒステリックな甲高い声と地を這うような低い怒鳴り声を聞きながら、じつと机の上のフォトスタンドを見つめる。

幼いあたしがいる。そして、両親が仲良く写っている。

そこには幸せそうな家族の笑顔があった。

大きく溜め息が漏れる。

いつからだろう…？毎日の恒例行事のようになってしまった、両親の喧嘩。

それにも、いい加減慣れてしまった。

最初はあたしも、言い争う二人を見ていたなくて、何とかしようとした。

でも、かれこれ三年。ずっとこんな調子で…あたしはすっかり疲れ、呆れ果て、今では二人のことには一切口を出さないことにした。大抵一時間くらいやり合って、母がわんわん泣きだし、父がそれを見て興ざめし…喧嘩は曖昧に終わる。

それが常で…あたしが出るまでもない。

しかし、今日はいつもと様子が違っていた。

騒ぎは三十分程でやみ、その後に唐突に…本当に思いがけず、母があたしを呼んだ。

いつもと違う筋書きと母の表情。

あたしは驚きながら、母に促されるままに両親の前に座らされ…  
そして……

「なんだって？」

自分の部屋に戻ると、美貌の青年が姿を現して尋ねた。相変わらず、空中にフワフワ浮いたままだ。

あたしはドアに寄り掛かり、そんな彼をじっと見つめた。

「ねえ、本当にあたしの願いを何でも叶えてくれるの？」

「ああ」

うなづく彼。真紅の瞳がまっすぐにあたしを見つめている。

あたしは目を伏せ、床の木目に視線を注ぐ。

「なんで…子供は親を選べないのかな…」

あたしは呟き、そして目の前の彼に問うた。

「なんで…子供を独りにできるのかな…」

どうして…？

呟いた途端に涙が溢れ出す。嗚咽を必死で飲み込む。どんなに淋しくても、悲しいことがあっても…いつもあたしは独りぼっただった。

それでも…いつか気がついてくれると思っていた。  
自分たちのことだけじゃなく、あたしのことに。

あたしがここにいることに気がついてー。

ずっと、あたしは心の中で叫んでいた。  
いつか、写真の中の笑顔を取り戻せると信じたかった。信じていたかった。

どんなに喧嘩しても、傷つけあっても…心の底では繋がっていて、離れることはない。二人には…父と母には絆が…あたしがいるから離れたりしない。

だから、いつか…必ずきつと…そう思っていた。  
けど…。

『離婚』

父と母が下した結論はあたしの、その淡い期待を裏切り、心を砕いた。

必死で守り続けてきた最後の希望の芽。  
それを摘み取られて、あたしはひどくうちのめされ、絶望していた。

あたしの気持ちは…？どうでもいいの…？  
どうして気付いてくれないの！？こんなに近くにあたしはいるのに……！！

「いつそ…殺すか？」

彼が静かに言った。その瞳には残酷な輝き。魔性の鮮やかな輝き。  
あたしは彼を見上げ、そして目を伏せる。

あんな両親、いない。

何度もそう思った。家庭をかえりみない父親。平穏な日常に満足できない母親。

憎んでも憎みきれないくらい、二人が嫌い。大嫌い！  
けれど…どんなにそう思っても……それでも……あたしは二人の娘だ。

彼の黒いマントを引き寄せる。初めて出会った瞬間から決めていた。

これは一つの賭け。彼は最終手段だった。願い事を言え！…と彼は言った。

あたしの願いは一つだけ。  
その思いはずっと昔から、胸の中でずっと息づいてる。  
それは願い。切望。

「あたし願いは…ただひとつだけ」

あたしは彼を見つめる。まっすぐな瞳で。

彼はあたしの願いを叶えてくれる唯一の存在。

この瞬間のために与えてくれた救い。病んで、ボロボロになったあたしの心を救えるのは、彼のみ。

意を決して、あたしは告げた。

「永遠に、あたしのそばにいて」

彼の真紅の双眸が驚きに見開かれる。

あたしは涙を流す。もう、何もなかった。あたしには…何も残っていないかった。

「あなたなら…それができる…」

永遠の命を持つ魔性の王子なら…。

「…それが…お前の願いか…？」

彼があたしを見つめて問う。それに強くうなずく。

彼はあたしを見つめていた。予想外の願いに信じられないという表情をしている。

「それが…あたしのたったひとつの願い。もう、独りはいや…」

彼はそっと目を伏せる。

そして、あたしの涙に触れ、

「お前の願いをかなえねば、私は自由になれない」

呟くように言うと、あたしを腕の中にさらうように抱きしめ、凜とした声ではつきりと言った。

「お前の願い、確かにきいたぞ」

その声と同時に目の前に虚空が出来上がる。

「この向こうに魔界がある。一緒にくる勇氣があるか？」

あたしは躊躇する事なくうなずいて、彼を見た。

「あたしの身に何か起こったら…あなたが助けてくれるんでしょ？」

「仕方ないからな…」

苦笑いを浮かべて、小さく呟く彼の首にギュッと抱き着く。

「ずっと…ずっと一緒にいてね…」

彼はあたしを抱く腕に力を込める。

虚空に飛び込む。その向こうには彼の故郷の魔界。

怖くない…と言ったら嘘になる。

だけど…

あたしはもう独りじゃない。ずっと彼がそばにいてくれる。

あたしは彼の腕の中で、そっと瞳を閉じる。

もう独りじゃない…

心から安堵して、あたしは彼に全てを委ねる。

願うのは、ささやかなこと。

独りじゃ、生きていけない。生きる意味もない。

あたしは永遠を手に入れた…！！

F I N

## （後書き）

あとがきです。

この短いお話は、私が生まれて初めて入った会員制同人サークルの一周年記念会誌『Funny』（1998年発行）に載せていただいたものです。

このサークルに入る以前も小説らしきものは書いていましたが、それまでの私は、ページ制限のある中でお話を書いたことが一度もありませんでした。

そして、こんなに短いお話を書いたこともなくて、何とも…稚拙な作品ですが、思い出深いものになりました。

この作品のテーマは『永遠』だったりします。

私のことをよく知っている方はご存知だと思いますが、私の『永遠』の定義は基本的に『死』の向こう側にある…と思っています。

この作品も例にもれず、ラストはそういう定義で書きました。

魔界は人が行ける場所ではないのです。

……生身では。

実はダークな物語だったりします。

でも、『永遠』の定義はどんなものでもいいと思います。人によって違うんだから、この作品の『永遠』も、続きも如何様にも想像して下さいませ。

今も未熟ですが、それ以上に未熟な本作品。

それでも、少しでも楽しんでいただけたなら、嬉しく思います。

ではでは。

ご縁がありましたら、またお逢いいたしましょう。（、、）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6752/>

---

ねがい

2010年10月11日05時50分発行